市は「住むひとが誇りと愛着を感じ、訪ねるひとの心に残る松江の景観づくり」を推進しています。

シリーズ 景観75

「みんなで残したい松江の景観400選集」から景観審議会が特にお薦めする景観

人参方（にんじんかた）の門

No. 213

「高麗（こうらい）人参の栽培、製造、販売を行った役所の門です。現在は両側に家が建ち、門扉がなくなり屋根だけ残っていますが、これがまた面白いです」と推薦いただきました。

寺町に現在残っているのは、役所の長屋門（ながやもん）（家臣などの住む長屋と一体となった武家の門の形式）の屋根の一部分です。明治時代の写真には長屋の一部が写っています。

松江における高麗人参の栽培は、松平家七代藩主治郷（はるさと）が領内での試作を命じたことに始まります。当時は幕府から種子を分け与えられたことから御種（おたね）人参と呼ばれていました。栽培に成功して事業が拡大するのに伴い、文化8（1813）年ごろに当時の古志原村から天神川沿いに役所を移して、集荷・製造・出荷の一貫した作業工程の拠点としました。「人参方」という独立した役所になったのは天保10（1839）年ごろといわれています。

茶人「不昧公」として名高い治郷ですが、一時は「出羽様（でわさま）（父の宗衍（むねのぶ）のこと）御滅亡（ごめつぼう）」と噂されるまで逼迫（ひっぱく）していた藩財政の再建にも取り組み、効果を上げました。産業振興策の一環であった高麗人参の栽培は現在も受け継がれ、「雲州人参」として全国に誇れる松江市の特産品となっています。この門から今につながる歴史に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

※文中の年代は「松江市史」に拠っています。

「みんなで残したい松江の景観400選集」は、市ホームページでご覧いただけます。

【問い合わせ】まちづくり文化財課 ☎55-5387

松江の景観400選 検索